

研究 覚え書き

2015年にシンガポールは独立50周年の佳節を迎えた。天然資源がなく、水の供給さえも隣国マレーシアに依存せざるを得ない都市国家が、1965年の独立後、急速かつ持続的な発展を遂げ世界有数の高所得国となった。奇しくも同年、「建国の父」として発展を牽引してきたリー・クアンユー初代首相が逝去し（享年91歳）、この国は次の50年に向けてビジョン構築が始まっている。

しかし多くのものごとがそうであるように、繁栄を永続的なものとするのは難しい。ましてや世界との深い連結性に依拠する同国にとって、時に「変化」は大きな不安要素ともなりうる。ではどうしたらよいのか？ その命題に接近する際に、白石隆が著書「海の帝国」のなかで綴っている次の文章が力をもつ。「われわれは過去を振り返ることで未来を構想する。未来は過去の延長上にか構想できないからである。『いま』を見つめれば見つめるほど、われわれの想像力は『いま』に囚われ、長期的なビジョンが夢想と、近視眼的思考が現実主義と取り違えられる。」

「いま」に囚われない

杉本一郎

私はマラヤ大学で長年、英領期シンガポールの長期経済統計推計を行い、それを基に同国の経済発展のモデル構築を標榜してきた。しかし資料を紐解いて分かるのは、シンガポールは経済的、行政的に独立した単位ではなく、海峡植民地や、英領マラヤという枠組みの一部として捉えられてきたという点だ。英領期に華人が主要となったシンガポールがマレーシアに加わることで、土着民と移民の民族構成が政治的軋轢を生み、マレーシアから分離独立した。独立後の両国の軌跡をみると、歩みの違いが強調されるが「不変」なのは、両国は隣接し続けてきたという点だ。現在シンガポールの対岸にあるジョホール・バルとその周辺地域ではイスカンダル・プロジェクトが大きなうねりをもって進行している。

この両地域の収斂を「いま」おきている「変化」と捉えるか、それとも「不変」の必然的現れとみるかは、シンガポールの次の50年を考える分水嶺となるかもしれない。

（すぎもと いちろう／東洋哲学研究所委嘱研究員）

現代倫理学の中心的な課題のひとつに倫理学の方法論的な問いがある。果たして、倫理学は概念分析やア・プリオリな知識を用いた伝統的な哲学的方法によって進められるべきなのか。それとも、他の経験科学と同じように、観察や実験などの経験的な手法によって進められるものなのか。これは牧口常三郎が『価値論』冒頭で掲げた問いでもあるわけだが、この問いに答えるためには、価値や規範に関する探求を経験的に行うことが本当に可能なかどうか、検討してみる必要がある。

近年の権利論に関する研究に目を移してみよう。ニューヨーク大学生命倫理研究センターのMatthew Liaoやイギリス・ウォーリック大学のKimberley Brownleeなどのまだ比較的若い世代の研究者たちは「子どもは衣食住のための十分な物資が与えられたとしても、人間として愛されなければ、気力の減退、鬱症状、学習障害など、様々な悪影響を被る」といった社会神経科学の知見に着目する。そして、この知見を土台にして、「子どもの愛される権利」や「社会的関係を奪われな

科学は倫理学に何を与えられるか 蝶名林 亮

い権利」など、これまで権利を巡る議論において見過ごされがちだった人間関係に関する権利の擁護を主張する。ここで注目すべきなのは、経験的知見に訴える彼らの主張は「権利とは何か」との根源的な問いにも示唆を与え得ることだ。権利論は教育なども含めた広い意味での「資源へのアクセス」を正当化することを目指してきたが、ここで挙げた論者たちが主張する人間関係に関する権利の擁護は、資源へのアクセスを重視する従来のアプローチが権利に関する本質的な要素を見落としてきたことを示している。倫理を考える上でも重要な権利という概念・考えを経験的知見に基づいて探究しているこのような研究動向は、牧口が主張した「価値に関する経験的探求」に内実を与えるものと言えるかもしれない。

牧口の主張を現代においてどのように擁護・発展させられるのか考えるには、牧口自身の主張や議論を明確にしつつ、このような最新の研究動向を丁寧な追い、考察していく必要があるだろう。

(ちようなばやし りょう／東洋哲学研究所研究員)